

平成30年度 学生海外PBLプログラム 概要

部局名 人文社会科学部

区 分	内 容
事業名	アメリカ/フランスでの研修によるグローバルマインド及び地域活性化意識育成事業①
指導教員	①人文社会科学部 南 修平
学生の所属	人文社会科学部文化創生課程2年生5名、社会経営課程2年生1名 人文社会科学部文化創生課程多文化社会コース3年生1名
渡航先 (渡航期間)	アメリカ合衆国（平成30年9月1日～平成30年9月16日）
実施スケジュール	<p>平成30年5月10日 事前学習・準備～</p> <p>〃 9月 1日 渡航</p> <p>〃 9月 2日 キャンパスツアー、ジャパンプラブ主催ウェルカムパーティー等</p> <p>〃 9月 3日 ケンタッキー州、イリノイ州へのデイ・トリップ</p> <p>〃 9月 4日～7日 協定校での学習、その後大豆祭に参加等 (6日にJapanese Classに参加、現地学生と交流)</p> <p>〃 9月 8日～9日 大豆祭参加、デイ・トリップ</p> <p>〃 9月10日～13日 協定校での学習（協定校内で10日にJapanese Dayのイベント実施、12日にDaycare Centerで子供達と交流）</p> <p>〃 9月14日 メンフィス市でミュージアム見学（1泊）</p> <p>〃 9月15日～16日 帰国</p>
プログラムの概要	<p>1. 目的： 協定校であるテネシー大学マーチン校を拠点とする研修を通じ、多文化社会への理解とグローバル・マインドの向上を促し、文化交流プログラムやイベントにおいて現地の学生や一般市民に弘前市や青森県の食・伝統文化のアピール・情報発信を行い、今後の地域活性化に対する意識を涵養する。</p> <p>2. 事業概要： 語学学習と文化交流プログラムを軸とする研修の他、現地最大の祭りへの参加や協定校内で様々なイベントを主催することを通じ、学生や一般市民に対して弘前市・青森県の情報発信を積極的に行う。また、キング牧師没後50周年の現場を訪問し、アメリカ社会・歴史への理解も深める。</p> <p>3. 設定した課題： 語学力の向上に加え、課外活動の中で弘前市や青森県の暮らし・文化・歴史についていかに魅力的に情報発信を行うかが課題となる。また、協定校があるテネシー州マーチン市は産業や学都といった点で弘前市と共通性があり、両地域の街づくりの特徴を比較・観察し、それらを参考に今後の地域への活かし方を考える。</p> <p>4. 期待される成果等： 様々な意見や考え方、暮らしや文化を学ぶことで多文化社会への理解が深まると同時に、そのことを通じて自分が暮らす地域やそこで培われてきた生活・文化の魅力や課題もより鮮明になる。また、それらについて他国の人と話し、互いの情報を交換することを通じて、故郷や地域に対する認識や愛着が改めて強まり、自信をもってそれらを語る力とマインドが身につく、問題解決のための積極的な姿勢につながることを期待される。</p>

5. 当事業が弘前市や弘前市関連地域にあたる効果・成果等：

受講者は研修で弘前市や近隣地域をアピールするとともにその成果を卒業後に観光や行政のような仕事で活かし地域に貢献したいと考えている。新しい発想が期待できるグローバルマインドを持つ若い人材が弘前市や近隣地域で活躍することは、地域の活性化と情報発信において様々な可能性を生み出すと思われる。

プログラムの様子



【写真1:教室での授業風景】



【写真2:大豆祭のリサーチ】



【写真3:日本語クラスに参加】



【写真4:Japanese Dayで奮闘中】



【写真5:子供達と日本の昔遊び】



【写真6:国立公民権博物館前で】

今後の展望

本学とテネシー大学マーチン校との関係は、数ある協定校の中でも最も古い歴史を有し、これまでに相互の間で学生の留学や教員の学術的交流が盛んに行われてきた。今回の研修は、そうした歴史があってこそ可能になったとも言え、学部の正規科目の実施を同校で受け入れていただけただけでなく、プログラムの充実のために時間も労力も大いにかけていただいた結果、実に多くの成果が得られた。参加した学生は全員2週間の滞在の中で濃密な経験をし、そのことは事後に提出したレポートから十分うかがえる。実際、学生は現地で積極的な交流をはかったことで、多くの友人を現地で作り、その関係は今も続き、中には同校から現在本学に留学している者も存在する。今回実施した様々なプログラムによって本学や弘前市に興味を持った学生も少なくなく、今後同校からの留学生の一層の増加が期待されるところである。

また、今回の研修はグローバル・マインドと地域活性化の意識を涵養することが主な目的であったが、研修後の学生は留学生の日常的サポートや交流、あるいは語学の学習に以前にも増して取り組んでおり、その成果は期待以上のものと考えている。若い人材がこうした経験を積んで地元への貢献を強く意識するようになる事業は、本学と地域の関係をより豊かなものへ発展させる可能性を大いに有しており、ぜひ今後も継続し、さらなる事業の充実に努めたいと希望している。そのためには、今回いただけたような財政面での支援は本当に有難く、参加を促す上で大きな拠り所となった。心より感謝するとともに、今後の支援を賜れば幸いである。